平成22年度学術ポータル担当者研修

研究者から見たリポジトリ

エンドユーザがリポジトリに期待するもの

東京歯科大学口腔科学研究センター情報支援部　新谷　益朗

2010.7.28 名古屋大学会場　2010.8.25 NII会場

1

私は小さな単科大学に所属する一研究者で、専門である歯科学も科学全体の中では医学生物学の隅に隠れている狭小な分野にすぎない。歯科の世界では機関リポジトリを活用する人はまだ少なく、その存在すら知らない人も多い。

そのような位置からリポジトリに対して期待や意見を述べることは、適切ではない面が多いかもしれないが、リポジトリがオープンアクセスを前提とする上で、多様なエンドユーザの声を届けることが、よりよいリポジトリ構築のヒントになるのではないかと願って、思うところを述べてみたい。

2010年は電子書籍元年…と世間では言う

2

いまメディアはこぞって書き立てている。「紙は無くなるのか?」「書店や書籍流通は電子出版によって絶滅するのか?」

しかし、このような議論はにわかに起こったことではなく、電子的出版と印刷書籍の関わりや、その将来的な展望については、1990年代の初めからから高い意識を持った人々によって、継続的に論じられてきたことである。

それが突然、「電子書籍元年」という騒ぎとなったのは、やはりKindleとiPadという非常に大きな可能性をもったリーディング・デバイスが相次いで上陸してきたからと言えるだろう。

学術出版は早くから電子化に取組み、普及がめざましい分野

3

言うまでもなく、学術出版は他のメディアよりも早く電子化が普及し、一定の成功を収めてきた分野である。われわれ研究者は図書館に足を運ばなくても、必要な学術情報のほとんどを自分の机上で手に入れることができるようになった。図書館はもはや単なる書庫ではなく、大学内における情報サービスの重要な拠点であると誰もが認識している。

だが、データ収集、統計解析、論文執筆など研究活動のあらゆる部分が電子化されていながら、最後の出版というところに大きな足枷がある。

電子ジャーナルといえども、いまだに紙の呪縛からは開放されていない

4

現在主要な学術雑誌の9割以上は電子ジャーナルを持っていると言われるが、その数字を逆に解釈すれば、電子ジャーナルのほとんどはいまだに冊子体に縛られていることになる。冊子体と電子版の組み合わせにどう折り合いをつけていくのかという論議は各所で数限りなく繰り返されていながら、状況は進展しない。

解決すべきは技術的な障害でも、合理的な課金システムの不在でもなく、紙という媒体へのこだわりという気持ちの問題が、いまだに大きな比重を占めているように感じる。

研究室で継承される因習

5

大学院生や若い研究者は、携帯電話の液晶画面で長文のメールをやりとりすることにも慣れていて、電子的文書を画面上で読むことには抵抗感が少ない。

しかしそんな彼らも、文献検索をするとまずまっさきにPDFファイルをダウンロードし、次に印刷して製本しようとする。それは紙に印刷されたものにこだわるシニアの研究指導者が多いからであり、紙を介在したコミュニケーションが研究室の中ではいまだに主体となっているからである。

冊子体のように有形のものにしか評価を示さず、無形のものには対価も認めない体質も、依然つよく存在する。

もうひとつの紙の呪縛

6

PDFが登場してすでに17年が経過したが、「異なる環境下でも出力結果が同じになる」ことを目的として作られたこのフォーマットは、印刷を想定した用紙サイズでページ・レイアウトをする利用が事実上ほとんどを占めている。PDFがここまで広く普及したのも、電子ファイルでありながら印刷するだけで紙媒体と同じものが再現できるということが理由であるのは明白だろう。

PDFを印刷せずに画面上で読む場合でも、A4用紙サイズでページをまたぐという紙の概念の制約は解けない。文字を拡大すればページごと大きくなるだけで、かえって縦横へのスクロールを強いられる不便は「やはり紙に印刷したほうが読みやすい」という結論に戻ってしまう。

オンスクリーン・リーディングというスキル

7

ところが不思議なことに、論文のPDFを画面上では読む気がしない、とにかく紙に印刷してみなければ落ち着かないという人も、電子メールであればどんなに長文であっても画面上で読むことにほとんど抵抗感はないという。これは電子メールがもともと紙のページの概念を持っていないからである。

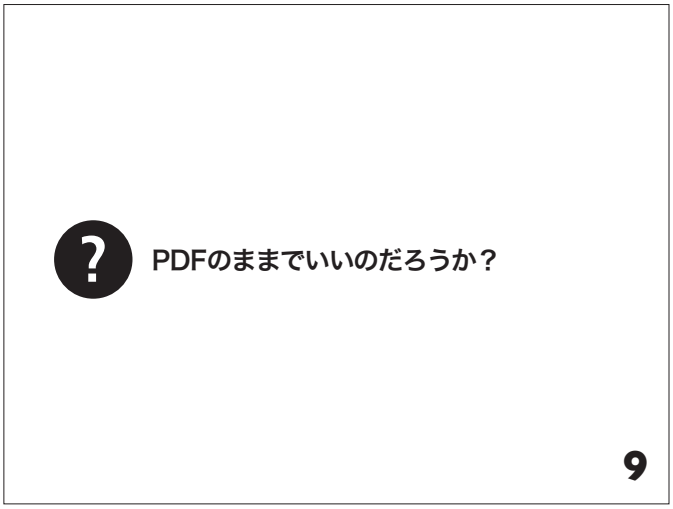
論文は印刷してみないとはじまらないというこだわりは、ユーザ自身の先入観の問題であり、もうひとつはいまだに学術雑誌は冊子体ありき、そしてDTPの延長としてPDFが安易にサービスされ続けているからだろう。

本当の意味でのボーン・デジタルへ

8

冊子体の存在や紙上の印刷に固執する人々は、「パソコンでは紙のように好きな場所で気軽に読むことができない」「ぱらぱらとめくったり、読み返したり、書き込んだりする自由が電子的なファイルにはない」と主張する。しかし最新のリーディング・デバイスはそのような指摘を覆すほどのポテンシャルを持つものが登場してきている。

紙の呪縛や用紙サイズの枠から開放されたとき、電子的な文書は本当の意味でのボーン・デジタルなものになる。機関リポジトリも、既存の概念でただ電子的なアーカイビングを行うだけでよいのだろうか。



現在の機関リポジトリでは文書的なコレクションは、ほとんどがPDFで提供されている。しかし、XMLやXHTMLのように拡張性や自由度が高い文書形式のほうが、これから電子デバイス上での文書リーディングスタイルの変化に対応できるのは言うまでもない。

文書を読むことが紙の上でなければならないという時代が終わったとき、もっと自由度の高い表示方法が求められることになるだろう。

理学・工学系領域では研究者自身がTeXを駆使して美しい文書を作る人が多い。最近は経済学者でもあたりまえのようにTeXを使いこなす人がいる。セルフ・アーカイビングの思想がこのような人々の中から生まれてきたことは自然に理解できる。

一方で医学領域では雑誌掲載論文のPDFリプリントに過剰な信奉がある。極端に言うと、誌面に組まれた字面しか信用されない風潮さえある。ましてプレプリントの提供には大きな抵抗感を持つ人が多い。

セルフ・アーカイビングを推進していく上で、PV (page view) 数やDL (download) 数を示して、研究者の理解やモチベーションを高めるのは有効なアプローチと言える。

しかし医学領域では、IF (Impact Factor) 至上主義がなおも根強い。被引用数ですら掲載誌のIFの前にはその輝きを失いがちである。どこの誰ともわからない人がどれだけ読んでくれたかよりも、自分の論文をIFの高い雑誌に載せるかということしか眼中にない人々が、いまだに非常に多い事実はたいへん残念なことだ。

エンドユーザの多くはオープン・アクセスやフリー・ジャーナルの普及を「お、タダか。いいね。」としか捉えてない。同時に、データベースの整備やドキュメント・デリバリーがオンライン化されたことを、単に「図書館にいかなくても済むようになって便利」程度にしか考えていない。さらには「オンラインで手に入らないようなものは考慮する価値なし」と決めつける人さえいることも事実である。だが、リポジトリの整備を「アクセスしにくい学術活動の成果を、タダで、簡単に手に入れる」ためだけのものと認識されては困る。

学術雑誌のオープン・アクセスがゆるやかに拡大することは間違いないだろう

13

今後、学術雑誌のオープン・アクセスが拡大し、既存の雑誌にひけをとらないIFを持つフリー・ジャーナルが増えてくると、これまでオープン・アクセスの一端を担ってきた機関リポジトリの役割やユーザの意識も当然変化してくるだろう。

そのときに機関リポジトリは、有料雑誌のオルタナティブ（代替的）な役割や雑誌がカバーしない情報の補完だけにとどまらず、機関リポジトリならではの存在価値をユーザに示すことができるだろうか。

ほんとうの目標は何だろうか？

14

機関リポジトリをスタートさせる生みの苦しみ、それを維持していくことの困難さは、なかなか大学の上層部やエンドユーザには理解してもらえない。だが、コレクション数や利用者数の増加だけを意識しすぎて、本来の目的を見失ってはならない。

図書館が「大学内における情報サービスの重要な拠点である」と認識されるだけにとどまらず、機関リポジトリが「大学のたから」として多くの人に愛されるものになってほしい。

そのためには大学にかかわるすべての人々が、その意識を少しずつ変えていく必要がある。図書館員の高い意識と努力だけは、機関リポジトリは育たないと思う。

最後に

15

図書館の電子化が進めば進むほど、face to faceのサービスは消えて行くが、いつかある日、無機的な電子書架のどこかに、図書館員の仕事の跡を感じることは可能だろうか。

便利さと引き換えに私たちが失ってきたものは何だったのだろうか。